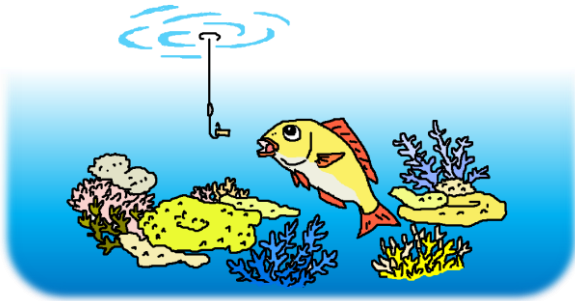


2013年10月1日 発行

八重山で多く獲られているクチナギ、タマンやサッコーミバイ。皆さんは、それらの小さな子供を見たことがあるでしょうか？今回は、食卓に上るおさかながどこで育っているかを紹介します。

親はどこで暮らしている？

八重山で多く漁獲されているブダイ、フエフキダイ、ハタの仲間の多くは、サンゴ礁の浅い海で暮らしています。

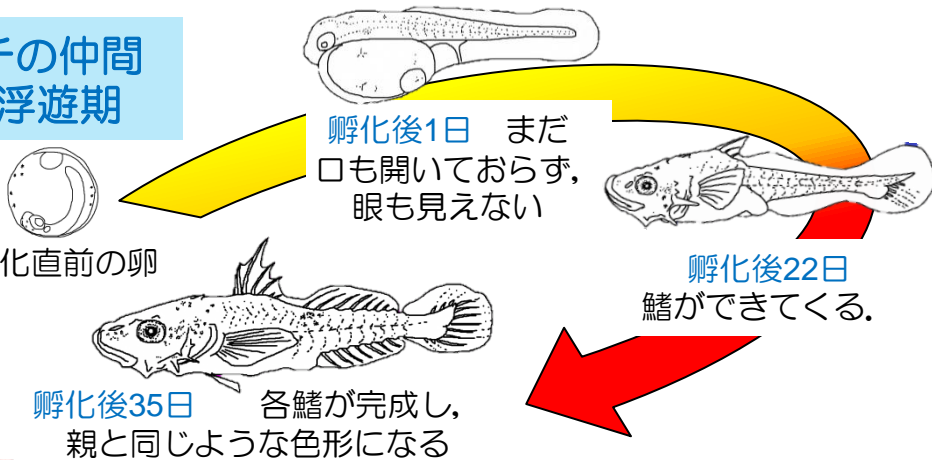


複雑な形のサンゴは、魚たちに隠れ家や餌、産卵の場所などを提供しており、非常に重要な役割を果たしています。

稚魚の旅

魚の卵というと、川底に産み付けられるイクラや、水草に産み付けられるメダカの卵をイメージする方が多いかもしれませんが、しかし、海の魚の多くは、分離浮性卵と言って、水中を漂う小さな卵をバラバラと生み出します。魚種によりますが、生み出された卵は2日ほどで孵化し、さらに30日ほど海の中を漂っています。この時期の稚魚(仔魚)は、浮遊期と呼ばれ、体が透明で、親とは似ても似つかない形をしています。

コチの仲間の浮遊期



稚魚の幼稚園

大海原の旅を終えた稚魚はどこへ行くのでしょうか？八重山でポピュラーな魚の育つ育成場いわば、魚の幼稚園を紹介します。

海草藻場で育つ魚



サンゴ礁で育つ魚



背が立つほどの浅い海に、アマモの仲間の植物が一面に生えている海草(うみくさ)藻場が、名蔵湾沿岸や竹富島の周りには広がっており、くちなぎ、まくぶなどがここで育っています。これらの魚は、10～15cm程度に成長するまで藻場で過ごし、大きくなるとサンゴ礁へと移動していきます。一方、あかじんやさっこーみーばいなどは、親と同じサンゴ礁で育っています。他にも、ちん(クロダイ類)やあさちん(リュウキュウドロクイ)等は、河口近くの干潟で育っています。沖縄本島では、沿岸域の埋め立てによって魚の育つ場所が消失してしまい、「幻の魚」と呼ばれるほど漁獲量が減ってしまった魚もいるようです。魚たちが生きていくためには、美しいサンゴ礁はもちろん、陸から近い藻場や干潟といった環境も健全に保つ必要があるのですね。

